

まちの循環の中で 設計する

渡邊貴明

鹿沼市旧市街は、宿場町としての往時の賑わいを失ったシャッター商店街である。その一角に私の事務所、そしてMADOをオープンした経緯は先に書いた通りである。しかしこの活動は、今この地域で起きているある経済活動の中のほんの一例である。

この旧市街では、主に若者が空き家や空き店舗を改修し、商いを始める事例が急増している。カフェやビストロ、居酒屋、花屋、美容室、ゲストハウス、デザイン事務所など、1999年以降のこの20年の間に約30件が開業した。ゲストハウスの宿泊客がビストロで夕食をとる。カフェのロゴマークをデザイン事務所がデザインする。さらには、協働で青空マーケットや結婚식을企画するなど、開業者の間で仕事を通じた新しいコミュニティが生まれている。

興味深いのは、開業者のほとんどが市外、県外からの移住者であるということである。宇都宮などの県内市町村からはもちろん、東京、さらには奈良や京都など、日本各地から開業者が集っている。

この若者たちの開業を支えるのは、江戸期から続く祭事「今宮神社例大祭」を仕切る旦那衆・若衆という既存の地縁コミュニティである。一定の自治権を持つ旦那衆・若衆が、地域外の開業希望者に空き家、空き店舗情報の提供や、時には経営アドバイスもする。開業に至れば、そのお店を日常的に利用することで見守り、応援する。開業者たちは、商いにより鹿沼に来街者を誘い、地域経済を一助することでその応援に応える。地元住民と来外者であった若者の間に相互扶助の関係ができ、そうしてつくられたまちに魅力を感じた別の来外者が集う、という循環ができつつある。

鹿沼の旧市街には、自分たちのまちを自分たちの手でつくっている、という感覚が生まれつつある。まちは上、つまり行政さらには国家から与えられるものだと思っていた私には、新鮮な感覚である。商いによってその感覚を醸成する開業者たちに、設計者として協力できることは多い。空間は開業者たちの舞台である。その空間と一緒に構想し、具体化するのが設計者である。その責任と、まちを自分たちの手でつくる喜びとともに、今日も事務所のシャッターを上げる。



建築設計室わたなべ 代表

1985年栃木県鹿沼市生まれ。関東学院大学人間環境学部人間環境デザイン学科（現、共生デザイン学科）卒業、宇都宮大学大学院工学研究科修士。一級建築士。関東学院大学非常勤講師。LOCAL REPUBLIC AWARD 2018最優秀賞を共同受賞